だから　森は　呪われた

ＡＬＳ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だから　森は　呪われた

【Ｎコード】
Ｎ７５４２Ｗ

【作者名】
ＡＬＳ

【あらすじ】
とある森で出会った、少女と青年の物語。呪いの森と呼ばれるその森で、自分のことを化け物と呼ぶ二人。そして、森が焼き払われることになり……　ふと思いついたままに、勢いで書き上げました（汗）　完結しているので、一気に読めます

少女と青年と化け物

呪いの森。
それは、その森に囲まれた集落の人が、その森を指して使う言葉。
その昔。その森には、化け物が住むと言われ、集落の人は誰ひとり、森へと入ろうとしなかった。
――わたしは、“イミゴ”だから。
そんな呪いの森で、泣いている少女がいた。
真っ白な髪と、病的に白い肌。赤い瞳をした、１０歳前後の少女だ。
彼女は、鬱蒼と生い茂る木々の間に身をひそめるようにして、泣いていた。
「なーに、泣いてるんだ？」
そんな森に不釣り合いな、陽気な声。
顔を上げた少女は、彼女を真上から覗き込む青年を認めた。
「……？」
「こーんなところで、なんで泣いてるんだ？」
青年は、明るい茶色の髪を陽光にきらめかせて、少女に笑いかけた。
少女はきょとんとして、青年の青い瞳を見入っていた。
「どった？」
「……誰？」
青年は、きょとんとした。
「おれ？　おれは、アル。アルクゥっていうんだ。きみは？」
「私は、エル。エリス」
「んじゃ、エル。なんで、こんなところで泣いてるんだ？」
エルは、ボロボロの服の袖で、涙をぬぐった。
「村に、いたくないの」
「なんで？」

アルは、ジーンズのポケットに手を突っ込んだ。
「わたし、忌み子なんだって。だから、パパもママもいないの。村にいても、みんなにいじめられるから、ここにいるの」
“忌み子”？」
彼は、首をかしげた。
「この、赤い目のせい。赤い目は、バケモノの証なんだって」
少女は、その血色の眼を伏せた。
「バケモノ、ねぇ」
アルは空を見上げた。木々の葉に遮られて、日の光はわずかにしか届かない。下地に草がすくないのは、そのせいだ。
「エル。実はおれも化け物なんだ」
にやりと、彼は笑った。
その笑みを浮かべた口が、見る間に裂けていき、耳も長くなった。むき出しの腕には長い毛が生え、骨格もどんどん変わっていく。
やがて、そこにいた青年の姿は、二足歩行する狼、物語に出てくるような狼人間へと姿を変えた。
少女は、呆気にとられたように、口を半開きにし、その様子を見ていた。
『どうだ？　化け物、だろ？』
大きく裂けた口から、くぐもった声を出して、彼は笑った。
少女の瞳が大きく見開かれる。
そして――
「すごい。アルも、わたしと同じだ！」
そう言って、少女は彼に飛び掛かった。
面喰って、彼は少女とともに、地面に倒れた。
「あちゃぁ。こうなるとはな」
その姿は、先ほどの青年のものへと戻っていた。
額に手をやり、空を見上げる。
「普通、そこで逃げ出すだろ？」
「だって、わたしもバケモノだもん」

にっこりと笑う少女の瞳には、もう涙はなかった。
「はいはい。まったく、こんな奴がいるとはな。お兄さん、びっくりだよ」
エルをひょいと抱き上げ、自分の上からどかす。アルは、上半身だけ起こした。
「でもな、エル。よく聞けよ。ここは、本当の化け物がたくさんいる。だから、もうここには来ちゃいけない」
「どうして？」
エルは、悲しそうな顔をした。
「わたしも、バケモノだよ？　それでも、ダメなの？」
「エルは人間だ」
アルは、悲しげに笑った。
「おれとは、違うんだ」
「どうして？　わたしは、村じゃバケモノって言われる。アルとは、違うの？」
彼は困ったような顔をして、後頭部に手を当てた。
「なんていうかなぁ。ともかく、エル、もうここには来ちゃだめだ。ここは危ないからな」
そのとき、どこからともなく獣の咆哮が聞こえた。
アルは素早く立ち上がり、耳を澄ませる。エルは驚いた様子で、アルの服の裾をつかんだ。
「エル、良いか？　嫌なことがあったら『悪い子は、森の化け物に食べられちゃうぞ』って言ってやれ」
エルの肩に手を置き、彼はしゃがんで笑った。
「村にいるのはつらいかもしれないけど、人生嫌なことばかりじゃない。前向きに考えていれば、自然と良いことが来るから」
それに、と言って、彼は立ち上がった。
「これは師匠の受け売りだけど。幸せって言うのは基準がないんだ。だから、どんな人でも幸せになれるんだよ」
エルは、アルをまじまじと見ていた。

「要は幸せだって思えたら、幸せだってこと。どうせ生きなきゃいけないなら、幸せだって思っていきたいだろ？」
にこりと、アルはエルに笑いかけた。
エルは、難しそうな顔をしていた。
「まだ、わかんないか。でも、そのうちわかるようになるさ」
アルは、エルの頭を撫でた。エルは、びっくりしたように、アルを見上げる。
「さぁ、行くぞ。ここは危ないからな。森の出口まで送ってやる」
「アル！　アルは、なんでここにいるの！？」
エルは、あわてて言葉を紡ぐ。
アルは、笑った。穏やかな笑いだ。
「ここに大切な人が眠っている。その人と約束したんだ。その人が目を覚ますまで、おれがここを守るって」

森と炎と人間と

「やはり、これ以上人が増えれば……」
大きな部屋で、大人たちが額を突き合わせていた。
「そうですね。食糧不足、それに住む場所もありません」
「あの森さえなければ、外の世界と接触できるのに」
「そうすれば、これらの問題もなくなるだろうな」
大人たちは皆、スーツを着ていた。きちんと顎髭や髪も整えられている。
「やはり、森を焼き払うべきか」
「しかし！　あそこは呪いの森。化け物がいるのですぞ！」
「だが、森は森。火をつければ燃えてなくなる」
「今日も、少女がひとり、森に迷い込んでしまった。何事もなかったから良かったものの、今後このようなことが起こっても、無事に済むとは断言できまい」
大人たちの中で、最も恰幅の良い、そして上等な服を着た男が、腰を上げた。
「明日の明朝、森を焼き払おう。万が一のために、女子供は家の中に避難させろ。村中の武器を集めて、男たちに装備させろ」
その男が見渡すと、大人たちは次々と頷いた。

――わたしのせいで。
エルは息を切らして、森を進む。森の奥へ行くほど、木々は増え、道をふさぐ。道らしき道などないけもの道を走り、走っては転びながらも、彼女は足を止めない。
――わたしのせいで、アルが！！

少女を突き動かすもの。それは、罪悪感か。
昨日、少女が森へ入ったことが大人たちにばれた。大人たちは、森を焼き払うことを決めたのだ。
――お願い、アル。無事でいて！
「きゃっ！」
むき出しの木の根につまずき、エルは派手に転んだ。
膝をすりむき、血が流れていた。手のひらにも土がつき、洋服も泥だらけだ。
泣きたくなるのもこらえて、少女は立ち上がる。にじむ涙を手の甲でぬぐい、彼女は走る。
「エル！？」
いつの間にかたどり着いた開けた場所。
「アル！」
アルは驚いた様子で、それでも抱きつくエルを何とか抱き留めた。
「なんで森に？　入っちゃいけないって、昨日言っただろ？」
「だって！　森が焼かれちゃうの！　わたしのせいで！　アル、逃げて！」
支離滅裂になる言葉。
アルは困惑した様子で、横を見やる。
そのときエルは、そこに何かがいるのに気が付いた。黒色の毛並みをした、獅子のような生物。
それが、低く吠えていた。
『ニンゲンが……なぜ、ここにいる』
「喋った！」
エルはびっくりして、アルにより一層抱きつく。
アルはエルをかばうようにして、彼女を抱きしめた。
「よせ！　この子がここに来ても、師匠は何も反応しない。彼女には敵意はないんだ！」
獅子はしかし、威嚇をやめない。エルの周りをうろうろと歩く。
エルの表情に恐怖が宿る。

そこへ――
「バケモノめ！　退治してくれる！」
そんな怒鳴り声と、幾人もの足音。
木々の隙間から、焔が見えた。
「村の大人たちだ！　森に火を放つって！」
エルの表情が一転。焦りに変わる。そして、アルに向かって逃げてと叫ぶ。
アルは、ただ微笑むだけ。
「大丈夫だよ、エル。それに、おれは逃げないって。約束しちまったんだ」
獅子を見やると、その獅子は声のする方へと向かって走り出す。
間もなく、大人たちの叫び声が聞こえた。
バケモノめ。助けてくれ。痛い。死にたくない。
その声が聞こえてきて、エルは耳をふさいだ。
「大丈夫、エリス。もう怖い声は聞こえないぞ」
そのふさぐ手に、アルは自分の手を重ねて、囁く。
エルが驚いたように、彼を見上げた。
彼は、優しく微笑んでいた。
「アル？」
耳をふさいだまま、エルはアルを見上げる。
アルの表情が変わる。何かを決意した表情だ。
「エルはここにいろ。良いな？」
「待って！　アル！」
その声は、アルに届かない。
彼はあっという間に見えなくなってしまった。
残されたエルは、呆然と立ち尽くしていた。

「バケモノめ！」
――そう、何度言われたっけな？
「死ね！」
――そう、何度殺されそうになったっけな？
「助けてくれ！」
――そう、何度叫び声を聞いたっけな？
「死にたくない！」
――そう、何度怒りを感じたっけな？
一声鳴くと、アルは狼人間へと姿を変えた。
先に戦場に出て、人々へと襲い掛かる獅子の手助けをする。
剣や斧を手に迫る人間を、その鋭い爪で薙ぎ払う。弓矢や銃を発砲してくる人間を、その鋭利な牙で食いつく。
「ヒィっ！」
悲鳴。怒号。銃声。
それらが混ざって、まるで音楽のよう。
すべてを破壊しようとする、自分の中の何か。それに突き動かされるままに、爪を、牙をふるう。
「化け物め！　死んでしまえ！」
横合いから飛び出してきた男を、爪で薙ぎ払う。
直後、銃声が聞こえた。
びくりと体が震え、熱を感じた。そこから、ずきずきと痛みが走る。
撃たれたのだと、どこか遠いところで感じた。
そこから流れる血の匂いが鼻につく。その匂いに、酔うかのように、より凶暴になる自分を感じた。
本物の獣のように吠え、人を襲う。
血が、臓器が、骨が、肉が地面を穢し、自分の体にまとわりつく。
「っくそ！　火を放て！」
あたりの木々が燃え始めた。焦げた匂いが鼻につく。

――森は……守らないと。
いつ負ったのだろうか。まったく感じていなかったが、体のあちこちに傷があった。おそらく、自分が殺した人間が、つけたのだろう。
その痛みさえ、もう、ろくに感じない。
「まだ死なないか！」
「火の勢いを強めろ！　すべてを焼き払え」
――そんなこと、させない。
火を燃やしている現場へと行き、そこにいる人間を薙ぎ払った。
ばらばらになりながら、宙を舞っていく人間たち。
――どうやって、火を止めようか？
不意に、背中に衝撃を感じた。
「よくも、村の皆を……」
押し殺した声は、少年のようだ。
振り返れば、目に涙をためた少年。その服は真っ赤に染まっている。
――なんで？
そして、背中に違和感があった。
手を背に当ててみれば、なにか生ぬるい液体を触った。
――血？
思考がついていかない。
――なんで？　どうして、こんなに出血している？
痛みが、熱が、あいまいな感覚に消えていく。
ようやく、自分の背中に斧が刺さっていると分かったときには、もう体に力が入らなかった。
目の前で燃えている炎。あれを消すんだ。そう頭で命令しても、体は動かない。
――あの人と、約束したのに。
炎は徐々に大きくなり、木々を呑みこんでは、焼いていく。次々と火は燃え移り、木々が倒れる音が響く。

「……アル……」
視界がかすむ。耳が遠くなる。
それでも、誰かが自分を呼んでいるのがわかった。
「アル……じゃ、だめ」
でも、意識は白に呑まれていく。

「アル、死んじゃダメ！　アル！」
エルは、血まみれのアルを何度も揺さぶった。
炎は、もうじきこの辺りを囲んでしまうだろう。それでも、彼女は何度もアルの名を呼ぶ。
大人たちは、火が勢いづくのを見て、逃げ出した。巻き込まれたくなかったのだろう。
獅子も、すぐ近くで地面に横たわっていた。生きてはいるだろうが、立ち上がる気力もないのだろう。その毛並みには、べっとりと血がついていた。
「アル！　アルってば！」
アルは人の姿に戻っていた。だが、その顔色からは血の気も失せ、辺りに血だまりができていた。
「ねぇ、アル……お願いだから」
エルの服は、アルの血で真っ赤に染まった。その手も血で穢れた。
エルの目から、涙がこぼれた。次々とあふれるそれは、地面に吸い込まれていく。
「ねぇ……アルゥ……」
涙声が、徐々に消えていく。しゃくりあげる声だけが、響く。
「ねぇ、誰か……誰か、助けてよ！」
必死になって叫んでも、もう誰もいない。炎が上がり、木が倒れた。

村の人間は、ここにはいない。ほかに、人もいない。
「ねぇ……誰か……誰か！！」
声をからして叫んだ。
ぽんと、誰かの手が、頭に置かれて、エルは顔を上げた。
そこにいたのは、金髪の青年。優しそうな微笑みを浮かべて、彼女を見ていた。
「誰？」
「そこで寝ている奴の師匠、かな」
その青年は、ゆったりとした動きで、アルの首筋に触れる。
その動きを、エルは見ていることしかできなかった。
「……心配ないよ。彼は大丈夫だ。仲間たちの中でも、とりわけて丈夫だからね。そのうち、目が覚めるよ」
「本当？」
「本当」
そして、彼は立ち上がり、獅子を見やる。
獅子は、ゆっくりと上体を起こし、彼を見た。
「それと、アルは泣き虫なんだ。目が覚めたとき一人だと泣いてしまうだろうから、君がそばにいてあげてくれるか？」
エルは、満面の笑みでうなずいた。
青年は、獅子を見やった。
「ヴォルグ！　動けるなら、二人を森の奥へ導いてやってくれないか？」
獅子は、立ち上がり、よろめきながらも三人の下へとやってきた。
その頭を、青年が撫でてやる。
「少しだけ、俺の力を分けてやるよ。運んだら、少し寝ていて良いから」
獅子は、一つ鳴くと、アルの服を口でつかんだ。そしてそのまま放り投げると、器用に背中に乗せた。
そして、ついてこいとばかりに、エルに向かって鼻を鳴らす。
「あれに付いて行けば良いよ。安全なところに連れて行ってくれる」

獅子はエルがついてくることを確認すると、先ほどとはうってかわって力強い足取りで歩き始めた。
「アルが目を覚ましたら、ありがとうって伝えておいてくれ！」
その言葉に、エルは振り返り、笑顔でうなずいた。

「さて、と」
青年は焼け残った木に触れた。
そこから、ふわりと風が巻き起こり、未だ燃え盛っている炎を消した。
「まったく、外に出たければ、勝手に出れば良いものを」
ひとりぐちった彼は、村のある方角を見る。
今度は地面にそっと触れた。
すると、何かが動く音がした。彼の目の前の木々が移動をはじめたのだ。
「いちいち大事にするなよな」
しばらくすると、木々がない、一本の道ができた。
そのことに気づいた村人たち。驚くもの、不安がるもの、喜ぶもの。反応はまちまちだ。
「……でも――」
彼の前を、ひとりの大人が駆け抜けていった。道ができ、外の世界と交流ができることを喜んだのだろう。
それに続いて、何人かの村人が気づく。その誰もが、彼に気づかない。
「やった！　外の世界だ！」
「これで、やっと――」
喜びの声が、銃声にかき消される。

村人たちは踊り狂った。次々と放たれる弾丸が、村人の体を貫く。
森の向こうにあったのは、城壁。そこの上に上った兵士が、村人を狙い撃ちしていた。
「何だ！？　なんで、森が！？」
「ともかく、一人残らず殺せ！」
銃声に気づいて、何人かが森の中へ飛び込んだ。すると、また悲鳴。森の中から現れたのは、黒い体をした大小さまざまな獣たち。
それが、村人を襲う。
「森の向こうの悪魔どもめ！」
「死ね！」
「数百年にわたる封印を解いたのか！？」
「化け物どもめ！」
村に残った人たちは、開けた道から見える場所で起きた出来事におびえ、家に閉じこもってしまった。
「――外に出たって良いことなんてないだろうに」

終わりに

数日後。村には、戦車が入り、家々を次々と焼き払った。
残った村人は、全員殺され、その大地は血で染め上げられた。
「ねぇ、アル」
「なんだ？　エル」
「わたし、ずっとここにいて良い？」
それでも、森の中は静かだった。戦車が入ってくることも、銃撃戦が始まることもない。
「もう良いさ。ずっと、ここにいても」
アルは、穏やかな笑みを浮かべて、エルの頭を撫でた。
「構わないだろ？　ヴァイス」
『我は、あのお方に従うだけだ』
狼は、そう言ってぷいとそっぽを向いた。
「ハハッ。きみは、変わらんな」
「あのお方って、金色の髪をした人？」
「そう。おれの師匠」
アルは笑顔を浮かべた。
「その人は、今どこに？」
「また眠ってるよ。こないだのは、叩き起されたようなもんだからな。また寝なおすって」
「また、いつか会えるのかな？」
エルは、首をかしげた。
「さあな。あの人は、ある意味、幽霊のようなもんだしな」
『本人に聞こえてると思うぞ』
「聞いてるの？」
エルはびっくりして、聞き返す。
「あの人は、すべてをわかってるって感じだしな。おれも、よくはしらねェんだ」

「不思議な人なんだね」
彼女は、くすりと笑った。
「今度会ったらお礼を言わないと。助けてくれてありがとって」
「その言葉も、聞こえてると思うぞ」
「本当？」
「ああ、本当さ」
二人の楽しげな会話が、森にこだました。

昔、昔のお話です。
それは、ある人たちが世界を支配していたころがありました。
その人たちは、力で、世界を支配していました。
あるとき、その人たちの支配から抜け、自由になろうとしたものが現れました。
その人たちは、世界中の人を仲間にして、とうとう自由を勝ち取りました。
世界を支配していた人たちは、自分たちの身が危なくなると思って、深い森の中に閉じこもってしまいました。
森には、凶暴な獣たちを放ち、誰も、自分たちに近づけさせないようにしました。
いつしか、その森は、呪いの森と呼ばれるようになりました。
いつからか、その森は、悪い悪魔を封じる、封印の森とされました。
森の周りに、悪魔たちが出てこないように、見張りを立てました。

悪魔たちが、入って来られないように、高い壁を築きました。
そして――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7542w/

だから　森は　呪われた

2011年9月17日03時26分発行